



3. ヘルスコミュニケーションウィーク 2022 名古屋 総大会長報告

阿部恵子

同総大会長、金城学院大学看護学部看護学科基礎看護学

このたび、ヘルスコミュニケーションウィーク 2022 名古屋の学術集会総大会長を拝命し、2022 年 10 月 1 日から 2 日、金城学院大学看護学部 W5 棟にて、ハイブリッド形式による学術集会を開催させていただきました。本学術集会は、ヘルスコミュニケーションウィークとしては、第 2 回目の開催となり、また 2022 年 4 月に発足したヘルスコミュニケーション学関連学会機構を母体とした 7 つの分科会が一堂に会する学術集会としては初めての開催であり、多くの学会からなる本学術集会を開催させていただいたことは大変名誉なことであり、このような機会を与えて下さいました機構理事の先生方をはじめ、会員の皆様に厚くお礼申し上げます。

本学術集会のテーマを「ニューノーマル時代のヘルスコミュニケーション」としました。インターネット、SNS の普及に加えて、コロナ禍の長期化による影響がヘルスコミュニケーションの在り方を大きく変えたといえます。このような急激な変化に対応するために、7 分科会による多方面からの視点で、現在の課題と今後の方向性について考えることができればと思い、このテーマを設定しました。

本学術集会では、第 14 回日本ヘルスコミュニケーション学会学術集会、第 2 回日本ヘルスリテラシー学会学術集会、第 2 回日本メディカルコミュニケーション学会学術集会、第 1 回日本医療通訳学会学術集会、第 1 回日本ヘルスマーケティング学会学術集会、第 1 回日本医学サイエンスコミュニケーション学会学術集会、第 1 回日本医療コミュニケーション学会学術集会の 7 つの分科会が、それぞれにシンポジウムを企画しました。医療、行政、教育、メディア、製薬企業などの多領域、多業種から参加者が集い、長期化する非対面、非接触でのコミュニケーションの在り方、情報の安全性、正確性、信頼性について活発に議論する場となりました。

本学術集会には、総勢 340 名の参加登録がありました。9 月 28 日（水）にオンライン会場をオープンし、一般口演 26 演題およびポスター 33 演題の発表を事前に視聴することを可能としました。現地会場では、コロナ感染第 7 波による急拡大後の影響もありましたが、当日は抜けるような青空と暖かい気候に恵まれ、10 月 1 日（土）は 114 名、2 日（日）は 95 名の参加者をご来場くださいました。総大会長講演および、基調講演以外は、2 会場にて、各分科会による 8 つのシンポジウムと一般口演の発表が並行して行われ、また、事前視聴を前提とした、ポスター発表者に質問ができる時間をオンライン会場に設け、ディスカッションを行いました。

1 日目の A 会場では、開会宣言の後、総大会長による本テーマの解説とコロナ禍の行動制限により人間関係が希薄化する時代こそ、人々の感情に目を向けたアートを基盤としたコミュニケーションが求められているという 10 分程度の会長講演を行いました。その後、ハワイからのシンポジストをお迎えし、第 2 回メディカルコミュニケーション学会学術集会を開催し、医学・医療者専門家間での正しい情報発信と共有、信頼関係、協働を目指した「医療者におけるメンタリング」について、メンターの概要とメンティーを育成するためのメンタリングの実践 tips などが報告されました。午後からの基調講演では、京都看護大学特任教授であり、なかがわ中之島クリニック院長の中川晶先生に「臨床のアートとしてのナラティブ・アプローチ」と題したご講演をいただきました。医療者と対象者が織りなす物語から行動変容を導いていくナラティブ・アプローチの実例では、聴衆が聴き入るほどの美しい物語がありました。

第 14 回日本ヘルスコミュニケーション学会学術集会では、「今こそ『人』がつなぐコミュニケーション：アートの心をどう伝え、どう受け取るか」をテーマに、「アート」をキーワードとして対人系とメディア系の 2 つのシンポジウムを企画しました。シンポジウム I では、テーマを「市民参加のコミュニケーション：アートの心をどう伝えるか？」として、患者や模擬患者が生活者としての価値観、健康観を伝えたり、アート作品を見て対話型鑑賞を行うなど、学習者の共感力、感性、人間性の育成を図る参加型授業が紹介されました。コロナ禍のコミュニケーションだからこそ重要であるアートについて議論が行われました。

第 2 回日本ヘルスリテラシー学会学術集会では、「COVID-19 とヘルスリテラシー：国民への情報発信と地域・職域での対応」をテーマに開催されました。感染症の専門家としてご高明な忽那先生をはじめ、各方面にご活躍されている先生方による、まさに現在問題視されているコロナパンデミック下のリテラシーを問うシンポジウムで、メディア

や製薬会社が注目し、さらに雑誌の取材を受けたシンポジウムでもありました。コロナパンデミックにおけるインフォデミックについて、医療現場、行政、企業そしてヘルスコミュニケーションの立場から議論され、根拠に基づいた正しい情報を幅広い世代に届くようにさまざまなチャンネルを使って発信していく必要性が指摘されました。B会場では、第1回日本ヘルスマーケティング学会学術集会在「なぜ今ヘルスマーケティングか」をテーマに開催されました。時代背景や生活様式の変化に伴い、疾病も変化している中、マーケティングの概念を健康・医療に適応させて行動変容につなげていく必要性が、実践例をもとに報告されました。ヘルスマーケティングにより健康価値が創生されることで、生活習慣病の減少が期待できると感じました。

2日目A会場では、第14回日本ヘルスコミュニケーション学会学術集会シンポジウムIIが開催されました。「市民・患者に向けた『ヘルスライティング』のアートと科学」をテーマに保健医療およびメディアの視点から市民・患者に向けたヘルスライティング、すなわち理解しやすい文字媒体の書き手に求められる知識や技能についての発表と議論が行われました。第1回日本医療コミュニケーション学会学術集会では、「医療における対人コミュニケーション研究の現状と課題」をテーマに開催されました。これまでの医療における対人コミュニケーション研究を、感情や感性を中核に据えた研究手法、歯学医学教育における量的研究、そして医学教育研究で試みた談話分析の3つの切り口から報告がありました。B会場では、第1回日本医療通訳学会学術集会在開催されました。「医療通訳の現状と今後のあり方」をテーマに、中立的な通訳者としての立場、患者側に立つ外国人支援者としての立場、また医療者としての立場の3種類の立場の医療通訳者が紹介され、まだまだ周知されていない医療通訳の現状を理解する良い機会となりました。最後のシンポジウムとして、第1回日本医学サイエンスコミュニケーション学会学術集会在開催されました。「医学サイエンスコミュニケーションの今まで、これから」をテーマに、市民の医学リテラシーを高め、医療者の社会リテラシーを高め、共に医学と社会の望ましい関係を考えていくという課題に、それぞれの立場から議論が行われました。

その他、一般演題の口演を分科会のテーマ別に6つに分けてご発表いただき、臨床、教育、研究とそれぞれのコミュニケーションに関する成果について報告され、学术交流が行われました。一般講演では、最優秀口演賞に須賀万智さんの「パブリックヘルスコミュニケーションにおけるユーモア表現の可能性の検討」が、最優秀ポスター賞には、家れい奈さんの「健康食品の“免罪符型”動画広告が視聴者に与える影響の評価：ランダム化比較研究」がそれぞれ受賞されました。おめでとうございます。今後、益々のご活躍を期待いたします。

学術集会後、ライブ講演はオンデマンドとして、10月31日までオンライン会場にて公開されましたので、見逃してしまったシンポジウムや一般口演が視聴でき、質問等は掲示板に書き込むことができるというメリットがありました。現地参加はできなかったけれど、オンデマンドで発表を視聴したいと希望されて、学会後に参加登録される参加者もあり、ハイブリッド開催の利便性が感じられました。

会場運営に関しては、参加者の方々から、「暖かいおもてなし」の言葉をいただきホッとした一方で、ライブ配信の音割れや、ログイン ID/PW の不具合などが少なからずありました。初めてのハイブリッド開催でもあり十分な準備・対応ができていなかったことを、この場を借りて、お詫び申し上げます。

今回、ヘルスマーケティング、サイエンスコミュニケーションなど、新たな分野が分科会に加わり、今後益々、ヘルスコミュニケーションを多方面からアプローチしていくことが可能となっていくと考えられます。分科会が一堂に会する貴重な場として、縦横の繋がりが発展し、市民・患者の健康行動につながっていくことを祈念いたします。

最後になりましたが、本学術集会在成功裡に終えられましたことは、ひとえにヘルスコミュニケーション学関連学会機構の皆様、実行委員の皆様方のご支援を賜ったおかげであり、改めて深く感謝申し上げます。

